

3

幕末期地方藩医の江戸詰御用

—米沢藩有壁家「日記」の検討—

海原 亮

住友史料館

江戸時代、三都を中心に全国各地で活動し、医学発展を主導した藩医の存在については近年、一次史料の読解に基づく実証分析の蓄積が進みつつある。報告者は2015年11月の日本医史学会例会で、出羽国米沢藩の医家に残された史料を紹介し、地方＝米沢と江戸の医界が密接な関係を有していた事実を指摘した。双方の密接な連携が、最新の医学知識を効率よく普及する点で有効に作用したと思われる。参勤交代の制度を根拠に、多くの地方藩医が公的な要請から江戸へ出向く機会を得たはずだが、彼らの実態についてはこれまであまり検討されてこなかった。そこで本報告では、米沢藩医有壁家「日記」から江戸詰の役に関する記録をとりあげ、具体的な動静をうかがう。

有壁家は江戸時代初期、数代が京都の啓迪院（曲直瀬玄朔門）に入門し、米沢藩医中で長らく特別な家格に置かれた家系である。幕末期まで活躍した同家九代富昌の「日記」は文化期以降の3冊が現存する。「日記」は公的書類でなく、途中の欠落もあるが、過半は富昌が藩医として活動した記録であり、その内実をうかがうに恰好の素材となる。

幕末期の「日記」記事に拠れば、富昌は嘉永5年（1852）年閏2月から藩主に随行して江戸詰の役を担っている。そのさい子息の養真も勤学を理由に掲げ藩へ願い出て江戸行を許された。米沢藩医の場合、このような形で江戸遊学を実現するケースが多い。ただし、養真は医学修業を名目に掲げたにも関わらず、儒学の師へ就き、海防論をはじめ時事的な学識に深く接したらしい。富昌も同年7月のプチャーチン来航時に応接掛をつとめた儒者古賀謹堂と関わりがあった。対外情勢が緊迫化する時期にあって、江戸詰する医家の交遊範囲は、医界にとどまらない拡がりを見せている。

一般的な理解として、藩医の役は藩主と家族、藩士に対する診療活動が中心となろう。ただし「日記」には富昌による診療実務の詳細がほとんど記されていない。医按・処方記録は必要に応じて、別帳が期されたと考えられる。「日記」の記事は、藩医＝武士として節季ごとの儀礼・法要に参列することや、各所祝宴への出席、藩主登城・他行御供などが過半を占める。むしろ、これらはいずれも藩医の重要な公的活動である。

江戸詰の役として特筆すべきは、奥向きの産科御用である。藩主の婦人（正室）は江戸在住が原則なので、産科あるいは小児科の御用が課せられる。富昌の場合も、藩主婦人の懐胎が判明した同年九月に「御産御用懸」役を仰せ付けられた。その後、十月の御着帯、十二月の御産屋御入初など、関係の記事が目立つが、富昌が直接、婦人を診療した記録は確かめることができない。その代わり、藩邸では婦人に付き添って出産にも立ち会う御側女中を用意している。「日記」で「御抱守」「御本婆」などと呼ばれる女中は、米沢で既に同様の御用に携わった経験者から選ばれる先例であった。女中のなかには「産科芸古」の目的で江戸へ赴き、寄宿しながら就学に勤める者もいたらしい。ただし、乳母は米沢から米沢から派遣される途中、候補者の乳汁が止まったので江戸であらたに雇用した。

富昌は嘉永6年5月に江戸詰の任を解かれる。1年数ヶ月という役の期間が通例に比し短いかなお慎重な検討を要するが、背景に家内の深刻な事情があった。養真が2月ごろ罹病、病状悪化のため江戸勤学を中断し米沢へ下ったことである。藩医の家を継承すべき人物の動静が、富昌自身のキャリアに影響を及ぼすことも十分に想定され得る。おそらく当時の通念では、藩医の役としての江戸詰と、その機に乗じた子息の遊学が家を安定的に継承させるための不可避のシステムと理解されていたはずである。

本報告でとりあげたわずかな事例からも、地方と江戸の医界の密接な連環が確認できる。このような構造こそ、当該期における医療環境の充実を支える前提であったと考える。